

# 初期堀辰雄文学の低音部

## 「末摘花」をめぐつて

大森郁之助

昭和五年九月号の雑誌『若草』に発表された「末摘花」は、原稿枚数にして十二枚分の、一口に云って片々たる小品である。分量だけでなく小説技法の上から見ても、注目に値するものは殆どあるまい。堀の初期の作品には雑誌等に発表された儘、作者の生前は作品集等に再録されずに終わったものが可成あるが、これもその一つである。

主人公の「彼」は「いろんな女友達を持つてゐたが」「そのうちの誰に向けたものでもなく」「誰であつてもいいやう」な「ラヴ・レター」を、「日課のやうに」書いては彼自身に宛てて投函していたのだが、それに倦きると、「恐らくもう一生のうちには会へないだらうやうな遠い田舎に住んでゐる」「いままですっかり忘れてゐた一人の少女のことを思ひ出し」て、彼女を新しい宛先を選ぶ。「もう五年も前」「一月ばかり北国の或る小さな町に旅行した」ときに知り合つた、「何の匂ひもしない小さな花」のやうな少女であつた。

手紙を書き直し書き直ししてゐるうちに、彼は「たうとう自分の心の底に、彼女に対する少量の、しかし真実な感情がもとのままに埋まつてゐることを発見」する。彼女からの返事が来ないために却つて「彼はいっしか彼の手紙を書くことに真面目になり出す」。

一方、両親が受取つてしまつてその儘隠していた彼からの手紙を、偶然に見つけてまゝとめて読んでしまつた彼女は、「非常に感動してし

ま」い、「この五年間といふもの、わたしは自分ではすこしも気づかずに、あなたのことを思ひ続けて居りました。そしていま、私はそれに始めて気がついた」、ついでには直ぐに上京して会わねばならない、と言つてよこす。そうなると彼の方は逆に、「彼女が彼を拒絶し続けているのだと思ひこんで、いくぶん自分の気持を誇張して書きすぎたところがあつた」と気づき、又、彼女の手紙の文章や文字が「じつに幼稚で、たゞたどしくて、彼女の無教育をさらけ出してゐる」ことが、「彼女とのランデ・ブウの悪い前兆のやうに思はれてならなかつた」。

さて彼女の上京の当日、「屋根の上はまだ北国の雪がところどころ残つてゐる」汽車から下り立つた彼女は、「寒さのために鼻のさきを真赤にしてゐる。」「彼はそれが彼のロマネスクな恋人であるのを発見して、あまりのことにもも言へなかつた。//その瞬間に、すべては終つた。」「どこかの静かな料理店で夕飯でもたべながら、彼女がすぐに田舎へ帰つた方がいゝことをゆつくり話してやらう。」という計画は、その通りに実行される。その日の夕方汽車の窓の内で「さすがに彼女は泣いてゐるやうに見えた。//しかし彼女の眼の赤さは、彼女のめうに赤い鼻の先によつてそんなにも目立たないくらゐであつた。」

帰郷した彼女から、やがて、ねくたいを送ってくる。それは「あんまり無趣味なもので、彼はちよつと厭な気がしたくらゐであつた」

が、反面「その心情をいぢらしく思はずにはゐられぬ」。彼女と別れる時、彼女の手をすら握らなかつたことが彼にはすこしばかり残り惜しく思はれたことを、再び「思い出して、彼の方からも「何か心をこめた贈物がしたいと思った。」

そしてその日「午後になると、彼は彼の女友達の一人のところへ出かけ」て行く。丁度絵を描いていた女友達のまねをして、彼もいたずら書きをする。

「女の顔のやうなものが出来ると、彼はその鼻のさきにちよいと赤い色をぬって、ひとりで苦笑した。それから今度はそつと自分の鼻のさきへ、その赤い絵具をぬってみた。」そして女友達を振り返って、「僕がこんな顔になったらどうしようかしら？」と笑いかけ、女が自分ののはんかちで鼻のさきを拭いてくれるのに任せながら、彼は「まだ田舎の女への贈物のことを考へながら、こんなにいい女友達が自分のすぐそばにあるのに、どうしてあんな女になぞラヴ・レターを書いたのかしらと、いまはむしろそれを不思議さうに」思うのだった。

以上が、「末摘花」のあらすじである。

これを、源氏物語の中の有名な醜女を描いた末摘花の巻の翻案、というふう云ってしまつてはなるまい。後者の「居丈の高う、を背長に見え」る肢体や「あなかたはと見ゆる」鼻の形と色、「額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、大方おどろおどろしく長きなるべし」という面だちなどは、先天的な、いわば本物の醜貌であつて、寒さで赤くなつた鼻とは意味が違う。

そういう違いのある鼻を、同じように、他の女の所で慰みものにするのだが、源氏の場合二条院へ帰つて幼い紫の上と遊んでやるのは自然な日課であつて、慰みものにするためにわざわざ出かけるというのは違ふ。更に堀の場合、慰みものにする相棒（本人はそうと知らなくとも）が何の弁えもない紫の上と違い成人の女性だということの残

酷さも、区別されねばなるまい。そして何よりも、源氏の場合は愛想をつかしたそれほどの醜女をも、須磨謫居から戻つた後に、窮乏と孤独から救いとしてやる蓬生の巻が用意されている。堀の作品にはそういう後日談はないのである。

堀のぶろつとに源氏の一卷が参照されたとすればあくまでばろでいの種としてであつて、後年の「かげろふの日記」以下の王朝物のような原典の精神へのもどかしい躡り寄りなどはなかつた筈である。しかも源氏における末摘花を、かりにも帝大國文科を前年に卒業している堀が右の程度にも知らなかつたとは思えないから、源氏での扱いが意識にない筈もなく、敢えてそれと違えたこの小説の構成は良くも悪くも堀のものと考えるべきだろう。

## II

「末摘花」の人物關係を、好意をよせる女性とべつの女性との対比というふう云うに要約するなら、それは既に前年昭和四年九月発表の「刺青した蝶」、五年五月定稿を発表した「ルウベンスの偽画」に見られるものである。主人公が愛している当の女性の方は明瞭さを欠いた、印象の稀薄な描き方に終り、もう一方の対比される女性の方がより具象的に実体感をもつて描き出される、という点までも、同巧である。

「ルウベンスの偽画」は昭和二年二月、<sup>(註一)</sup>『山繭』二巻六号に初稿（現在の形の前半部）が発表され、三年後に後半を加えた定稿が示されたという、長い過程をもつ。その後半部は基本的かつ重要な人物設定と挿話において、半年前の「刺青した蝶」と共通すると見られるが、この二作（一ぶろつと）での肝心な<sup>(註二)</sup>愛人<sup>(註三)</sup>の心象の稀薄さ、不鮮明さについては、小久保実氏の詳細な論述がある。すなわち、

愛の対象であるはずの<sup>(註四)</sup>彼女<sup>(註五)</sup>について、われわれはただ、ここに引用した程度（「彼女の顔はクラシックの美しさを持つてゐた。

……彼はいつもこつそりと彼女を『ルウベンスの偽画』と呼んでゐた。』の印象しか与えられない。ところがそれと対蹠的に、

ぎらびやかに登場するのが、有名な男爵のお嬢さんである。その  
 ▲刺青した蝶のやうに美しい▽お嬢さんの声が、▲ルウベンスの  
 偽画』の聲にそっくり▽なのであつた。(略)△彼女▽が蝶のように  
 美しいお嬢さんからうけた印象も、「ルウベンスの偽画』では控  
 えめに記述しているが、「刺青した蝶』では、▲僕も彼女を美しい  
 とは思つてゐた。しかし彼女の美しさは僕にすこしの幻覚も感じ  
 させなかつた。僕の愛人が僕に強い幻覚を感じさせるやうには。  
 しかも僕がそれだけ美しいと思ふ位だったのだから、彼女はよっ  
 ほど美しいのに違ひなかつた。▽と、その圧倒的な美しさを強調  
 している。(略)▲刺青した蝶のやうに美しい▽お嬢さんは書け  
 るのに、どうして△彼女▽のことになると臆病になつてしまふの  
 であらう。

という疑問を提出される。

「ルウベンス……」の素材については堀自らの証言がある。大正十  
 四年夏軽井沢滞在中の堀が父上条松吉氏に宛てた二十三通のはがき  
 を、のちに一括して「父への手紙」と題して保存していたというが、  
 それに付したため(昭和二十七年頃の作成かという)の中に、  
 堀「ルウベンスの偽画』はこの夏のことを主材して美化して小説  
 化したもの

と記す。これを踏まえて小久保氏は、

作者のことばを信ずるならば、その▲美化▽は、△彼女▽をでき  
 るだけ作品の後景へ押しやる方向に作用している。(略)私は、  
 △彼女▽と△お嬢さん▽はともに分身だと考えたい。作者は一人  
 の少女像を描かずに、二つの分身にした。それが▲美化▽ではな

かつたのか。  
 と推察する。堀がそういう分身を必要とした(と、小久保氏が考  
 へる)一つの理由は、

コクトオがオジリスという俗物を実に生きいきと描いているのを  
 読んで、▲あんまり生き生きと描かれてゐるので、僕はコクトオ  
 の中にもさういふ俗物を告発したい位だった。▽というように考  
 へる堀辰雄は、△彼女▽から△お嬢さん▽的な要素を剝離せず  
 はいられなかつた  
 のではないかという仮説である。

同じようなことは、「末摘花」の翌月発表された「聖家族」につい  
 ても云えるだろう。

主人公河野扁理は絹子への愛の徴候に対する錯覚から、彼女から遠  
 ざかる為に、「小さくてそんなに美しくない」「カジノの踊り子」の  
 一人に近づく。この踊り子の描写は「ルウベンス……」のお嬢さんの  
 場合と違って、多くの筆を費やしてはいない。だがその踊り子が「一  
 日十幾回の踊りにすっかり疲れてゐた。だがその自棄気味で、陽気さ  
 うなところ」が扁理の心をひきつけた、とか、「彼女は扁理の心を奪  
 はうとして、他のすべての男たちとふざけ合つた。そして彼を自分か  
 ら離すまいとして、彼と約束して置きながら、わざと彼を待ち呆けさ  
 せた。／＼一度、扁理が踊り子の肩に手をかけようとしたことがあ  
 る。すると踊り子はすばやくその手から自分の肩を引いてしまった。  
 そして彼女は、扁理が顔を赤らめてゐるのを見ながら、彼の心を奪ひ  
 つつあると信じた。」という説明、又、絹子の眼を通して、「噴水のほ  
 とりに、扁理が一人の小さい女と歩いてゐる」で「その小さい女は黄と  
 黒の縞の外装をきてゐて、何か快活さうに笑つてゐた。」といった描  
 写。これらは絹子の場合に比べて、いかにもそこに一人の実体を持つ  
 た女を感じさせるのではないか。(「聖家族」四)

小久保氏のように此処でも「踊り子は、△お嬢さん▽の変形であるう」、つまり絹子の分身だろうと考えれば、極めて重要な人物である筈の絹子が実体感をもって描かれていないという不審や非難は、形式的にはその通りだが、実質的には或る程度まで救われることになる。

だが、分身を作らねばならなかった理由はよくとおへの嫌焉という仮説が一の説明になるし、分身とすればその生彩も納得されるとして、俗物性なら俗物性を分身に転移させてしまった残りの△絹子▽や△彼女▽が臆ろになり又抽象画めいてしまっている理由は、どう解したらよいか。まさか、俗物性等々こそがじつは△彼女▽の代表的要素だった、というわけでもあるまい。

この点に関連して小久保氏が「読みようによっては、『刺青した蝶』は、△僕の愛人▽に宛てた恋文のような感じさえしてくる」といわれたのは、恐らく、象徴的な意味なのだろう。△絹子▽や△彼女▽にこの小説を読ませることによって手紙代りに訴えかける、という、例えば近松秋江の「別れた妻に送る手紙」のような生々しい実生活密着の事情を、ここに想定するのは冒険すぎよう。しかし、△彼女▽たちに現実の行為として訴えるのではなくても、作者の心の中の問題として、△彼女▽たちがそれに向かって語りかけるべき対象又はこの作品によって考えつめるべき対象になっていた(＝描くべき対象ではなかった)、ということとは、まだしも可能性があるだろう。

小久保氏が使われた意味とは大分違ったものになってしまうのかも知れないが、△恋文▽という語をこの意味に借用すると、考えがまともめ易い。

しかし又、△恋文▽や△絹子▽(に残されに要素)は作者にとつて描くべき対象でなく、△お嬢さん▽や△踊り子▽(に転移された要素)は描くべき対象だった、というふうに、作者・作品に対する関り方の差違を想定することになれば、後者を敢えて前者の分身と見なく

ともよいのである。もともと別個に実在する一人格であってもよいのである。

つまり、△お嬢さん▽のような生彩と実体感のある描写をなし得るのは最も関心ある△彼女▽の分身だからだ(即ち、△お嬢さん▽は△彼女▽の分身)というのも一つの考え方だが、べつの一つの考え方として、当の△彼女▽も同じ様に描けば描けるのだがこの作品では描く必要・描こうという気持がなかったのだ(即ち、△お嬢さん▽と△彼女▽は別個の存在)とも考え得る筈である。

考え得る、と云ったけれども、じつはいっそその方の考え方をとりたいふしもある。というのは、①「刺青した蝶」から「ルウベンスの偽画」にかけて△お嬢さん▽の魅力の捉え方に推移があり、その推移の方向に沿って、②「末摘花」や「聖家族」では△お嬢さん▽に相当する役割の人物の身分が下落していることである。

②から先にいえば、△お嬢さん▽に相当する筈の「末摘花」の北国の少女や「聖家族」の踊り子は、捉え方がどうこうと云う前にその種姓や容姿そのものにおいて、△きらびやかな魅力▽を奪われている。北国の遠さや五年前の思い出という時間の魔術がどう幻想の霧をかけようと、土台は「何の匂ひもしない」小さな花なのであり、絹子から逃れる必要から扁理がどう自分の心に強制したところで、もともと相手は「小さくて、そんなに美しくない」「すっかり疲れ」た踊り子なのである。そのことは「彼」や扁理は忘れるときがあっても読者ははっきりと知らされていて、その認識を前提として「彼」や扁理の△気まぐれ▽につきあうのである。

「聖家族」では絹子が、相手を踊り子と知って、「扁理と一しょにゐた人はそんな人だったのか」と考える。

「きつと扁理はそんな人なんか愛してゐないのかも知れない。(略)あの人の愛してゐるのはやっぱり私なのかも知れない。そ

れだのに私があの人を愛してゐないと思つてゐるので、私から遠ざからうとしてゐるのではないかしら。さうして自分をごまかすためにきつとそんな踊り子などと一しょに暮らしてゐるのだ。そんな人なんかあの人には似合はないのに……

〔聖家族〕五)

この「少女らしい驕慢な論理」を、扁理の立場から△そのとおりだったのだ▽と感じているのが、「末摘花」の「彼」だといえよう。

そして「聖家族」では、驕慢な論理という非人格的なものと、その論理の傀儡化した絹子とを正面に据えて描き、論理の適用対象となる踊り子は脇役であった。「末摘花」では、その論理を実感として行動するに到る「彼」によって弄ばれる結果となる、北国の少女の感情が、長時間、読者の目をひく位置にある。

「聖家族」に比して「末摘花」に、後味のわるさともいふべきものが有る所以であろう。

ところで、このように△絹子▽から「そんな人」と規定される踊り子や北国の少女は、絹子なり女友達なりの分身とは考え難からう。前者は、後者との△そんな▽外形の違いということが存在内容の中心なのである。後者と違うということが、この作品での存在意義なのだ。そうした前者が後者の分身だとすると、△そんな▽に違う前者の外形がじつは後者に属していたものなのだ、つまり前者と後者の外形の違いということはないのだ、といった論理の撞着に陥つてしまふわけである。

このように別人格と考えた方が通り易い踊り子や北国の少女が、絹子や女友達の△下位▽に位置づけられていることに連絡するかのよりに、先行する作品「刺青した蝶」や「ルウベンスの偽画」の△お嬢さん▽はその△さびやか▽さを次第にひそめて、△彼女▽の△上位▽から下がつてくる傾向を見せる。

年次順に、「刺青した蝶」(昭4・九月発表)をA、「ルウベンス……」の改造社版『不器用な天使』(昭5・七月刊)収録本文をB、同じく「ルウベンス……」の江川書房版『ルウベンスの偽画』(昭8・二月刊)収録本文をCとすると、A・B・C三種の表現の間には次のような目立つ推移がある。

(1) A——僕も彼女を美しいとは思つてゐた。しかし彼女の美しさは僕にはすこしの幻覚をも感じさせなかった。僕の愛人が僕に強い幻覚を感じさせるやうには。しかし、すこしもさういふ幻覚なしに、云はばすこしも割引なしに彼女を見て、しかも僕がそれだけ美しいと思ふ位だったのだから、彼女はよっぽど美しいのに違ひなかつた。

B——「僕」が「彼」、「僕の愛人」が「ルウベンスの偽画」と呼び換えられる程度で、Aとはゞ同文。

C——Aの傍線部(Bも共有)なし。

(2) A——あの子爵の令嬢を見ながら、彼女の女友達の一人が、「あの人、すこし足が太かない？」と非難めいたことを云ふと僕の愛人は、「あのくらゐならいい方よ」と言つてしきりに弁護したことがあるのだ。それにしても、僕の愛人はなんと優しくそして謙遜な心を持つてゐることだらうと思つた。

B・C——(共に)Aの傍線部なし。

(3) A——(令嬢の)声を聞くと僕はびっくりした。それは僕の愛人の声に実によく似てゐたからである。(略)彼女はその青年や九官鳥を相手にしてたえず小鳥のやうに喋舌つてゐた。僕の愛人はそれに比べるとまるで花のやうにしか喋舌らないのであつた。つまり二人の少女の声は、すべてを除いて、わづかに似てゐたのであつた。

B——「九官鳥」が「鸚鵡」、「僕」が「彼」、「僕の愛人」が「ル

ウベンスの偽画」となる程度で、Aとほぼ同文。

C——Aの傍線部(Bも共有)なし。

(1)について云えば、A・Bの幻覚云々が逆説的にお嬢さんの美しさを強調していることは、前に引いた小久保氏の指摘もある。「ルウベンス……」の定稿ではそれが削除される。

(2)は、直接には「僕の愛人」の方の美德を述べる文だが、(3)と組合わせて考えれば、「僕の愛人」を媒介としてお嬢さんを「僕」にとって無縁ではないものを感じているとも謂えようか。(3)も、A・Bは「すべてを除いて、わずかに似てゐる」という逆説的表現で、その僅かな口数(僕の愛人の)の酷似を強調しているわけだろうが、これも「ルウベンス……」定稿では除かれる。

強烈な美しさと、自分の愛人との酷似と、この二つの魅力は性質はむしろ逆に近かるうが、どちらも異常な魅力には違いない。それを共に失なわせた「ルウベンス……」の定稿は、お嬢さんの美や魅力に対する「彼」の感受性を常識的・第三者的なものにしてゐる、と云えよう。だが少なくとも或る時期の堀においてはこの種の軽井沢令嬢を異常な魅力として捉え、かつそのことよって彼の異常な感受性をも示すというのが、常則であった。五年七月発表の「天使にからかふ」では、「いつも此処の社交界の人々からその品行について蔭口を云はれ、冷笑的な態度で取扱はれてゐる、そしてそれらのすべては彼女の美しさに対する嫉妬ではないかと思はれるほど美しく、快活な少女」に会える可能性だけに引かれて、「真面目そのもののやうな」「J夫人のテイ・パアティに」出かけて行く「私」が描かれる。そして「私」はその会場で、少女の傍若無人な舞踏を人々が「あたかも悪魔に抵抗しようとする天使たちのとりとめない不平のやうに」齟齬し合っている時、逆に「その憑かれたやうなタンゴの踊り子達に、はげしい拍手を浴びせたいのを、一生懸命に我慢してゐた」のである。

こうした感受性に対して「ルウベンス……」定稿が一つの変化であることは疑いない。くりかえして云えばそれは延長線上に「末摘花」の北国の少女や「聖家族」の踊りの設定が在ると考え得るような変化であり、△お嬢さん▽の異常な魅力に向かつて傾斜していた姿勢を立て直して、△彼女▽との世界の安穩さ・安定感を自らに説得しようとする変化である。

### III

ところで「聖家族」については、その登場人物や人間関係はそれぞれ実在した人物や関係を基礎として作られていると考えるのが定説である。即ち、死んだ九鬼は芥川龍之介、細木未亡人は、芥川の晩年に「越し人」の名で懐かしんだ不詳の女性に屢々擬せられる、竹柏園門下の歌人であるらんど文学者の片山広子(筆名松村みね子)女史、絹子は女史の令嬢筆名宗瑛さん、そして河野扁理は堀辰雄自身に。

又、「ルウベンスの偽画」が大正十四年夏の軽井沢での体験に取材したという堀のことばを信ずる限り、「聖家族」と人物関係の照応する「ルウベンス……」での△彼女▽も(「刺青した蝶」での「僕の愛人」も)、宗瑛さんに拠る造型と考えられる。

だが、作品にはつきり投影された期間という意味で昭和二年初(「ルウベンス……」初稿)から五年秋(「聖家族」)までを取り上げてみても、宗瑛さんとの間の感情は「ルウベンス……」のような少年少女の夢めいている時ばかりではなくて、「聖家族」のような錯覚と警戒とさぐり合いが交錯した時期も、あったのではないか。谷田昌平氏は堀の昭和四年二月十二日付神西清氏宛書簡に「僕の欲しいのは唯愛だけだ。それなのに僕の知ったのは、一詩人は生きてる間は誰からも本当に愛されぬと云ふ事だ」とあるのを引いて、この時期の「宗瑛への感情の動き」を指摘された。<sup>註4)</sup>

もつとも、この個所の文意はその前の「何といふ不当な誹謗とそして不当な賞讃を僕は受けてゐるか？」と続けて、詩人として読者から受けるべき「愛」をさしているかとも思われる。

それよりも、当時の具体的な二人の姿は、例えば深田久弥氏に

（「聖家族」を書いた時）その原稿料を貰って、彼は浅草の金田とかいふ鳥屋で私に御馳走してくれた。同席に宗瑛さんがゐた。宗瑛さんはその頃の堀の恋人であった。

というふうに記憶されている。<sup>（注5）</sup>又、堀の内面において持った宗瑛さんの重みというようなことについては、現未亡人多恵子さんに、次のような回想がある。<sup>（注6）</sup>

戦後、神西（清）さんは追分の堀のまくら元で、「宗瑛君がまた小説を書きだしたよ」と言われた。辰雄は「そうか、うまくゆくといいが、むずかしいだろうね」と静かに答えていた。その日帰られる神西さんを送って追分の駅にゆく途中、神西さんは「おくさんは宗瑛さんのことを知っていますか」ときかれた。（略）神西さんは時々、辰雄の中に安住している私を憎らしく思うようだと私は心の中で思った。

堀が直接宗瑛さんのことを述べたものとしては、昭和五年一月の「宗瑛の作品について」（『文学』四号収。のち改題「宗瑛」）がある。

そこでは、こくとおや永井龍男の作品と並べ（!?）て、「僕を感動させる作品はどうも二通りあるらしい」その一方の型として、雑誌『1929』十二月号に載った宗瑛の作品「エレファンタの修道僧」を挙げる。「ジョイスの方法を実によく自分自身のものにしてしまつてゐる」「僕の全く知らない世界の中へずんずん引つ張り込んでしまふ（略）天使の手を感じ」させる作品として。

これは恐らく最大級の賛辞といつてよからう。この賛辞が昭和四年から五年の交のものだということは、下衆な云い方だが、やはり注意

したい。「未摘花」や「聖家族」に半年余先立つ時期である。△絹子▽乃至△女友達▽と対比するのに、或いは貧しく或いは鄙びて、絹子のことばを借りれば「あの人に似合わない」少女を配するように成った、その半年前である。

この少し前、昭和三年夏作品「不器用な天使」などには、△絹子▽をも「ルウベンスの偽画」のあどけない△彼女▽をも介入させない世界が、熱っぽく作り上げられている。「カフェ・シアノアル」の一人の女給を、友人の「楨」が「ひどい空腹者の食欲さをもつて」欲しがっている。それが「僕の中に最初の欲望を眼ざめさせ」、彼女が楨を拒んだと聞くと「僕一人でカフェ・シアノアルに彼女に会いに行くといふ大胆な考へを」起こさせる。何度目かに「僕」は朝の公園での逢引を約束させ、公園のベンチでは太陽が「彼女の頬に新鮮な生の肉を与へてゐる」のを「感動して見つめ」、一時間後に立ち上がった時彼女の着物の腰のまわりに「ベンチのために出来た皺は僕の幸福を決定的にする」。翌日の午後二人で活動写真を見ているうちに、「僕はもはや僕が彼女の眼を通してしか世界を見ようとしなれないに気づく。（略）僕は、もう僕の中にもつれ合つてゐる二つの心は、どちらが僕のであるか、どちらが彼女のであるか、見分けることが出来ない」のである。

右に引いた最後の状態は、八年後の絶唱「風立ちぬ」での、「あのとき自然なんぞをあんなに美しいと思つたのはおれぢやないのだ。（略）節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みてゐただけなのだ。」という一体感の極致との相似を云うまでもあるまい。「不器用な天使」の「僕」に「堀その人の恋情を見る」という高田瑞穂氏の評の<sup>（注7）</sup>ある所以である。

この△欲望▽は「楨」に比べて「いかにもか細く」「肉体の香や性欲の臭いは、そこにはほとんど見いだされぬ」にしても、しかし空

想の所産というものではなく堀なりに現実<sup>(註8)</sup>に体験した官能の再構成であつたかと思われるのである。

窪川鶴次郎氏の記憶によれば「昭和二年のはじめ頃だったか」、室生犀星・芥川・萩原朔太郎と堀や窪川ら雑誌『驢馬』の同人が上野の三橋亭に集まって「パイプの会」を始めた。その店に「僕たちがブリー・バードと呼んでいた、せいすらりとした、いわゆる美しい顔ではないがそう呼ばれるような清潔な娘々した女の子」がいて、「西沢(隆二)のちのぬやま・ひろし氏」がその子を好きになり、(略)ずつと後になって堀辰雄がブリー・バードとドライブなどしているということを聞いた」という。堀自身も「パイプの話」(昭5・10・27『帝国大学新聞』)のち改題「パイプについての雑談」で、「そこにひとりの可哀らしいウエイトレスが居て、その人を僕はひそかに好きになった。好きになってはならない人だったのに。(略)さうして僕は一人でやきもきしてゐた。」と、裏付けをしている。

だが裏付けとはいっても、「一人でやきもきしてゐた」という段階で話を打切っているのは肝心な部分の省略(実質的には虚構)があるわけだ。伊藤整の記憶では、その後日談だが「神田小川町の角に近い宝亭(後出、堀の書簡では多賀羅亭)」に「名は忘れた、瘡せた背の高い、目の細い、美人とは言へないが静かな表情の女」が勤めていて、出版社金星堂の福岡益雄氏はそこへ行く度に「堀君に逢ひますか」などと、少しからかふやうに言った」ものだった、という。

「その人と堀君との間には、世間的に考へられることは、何もなかったと思ふ。」という伊藤整の注釈はいかにも彼らしい神経のゆきとどいたことばであり、それとして尊重されるべきだろう。だがその次の、「しかし、その頃堀君は著名であり、その料理店の少女は淋しさうだった。」という追記も同じように心して読めば、少女が「淋しさうだ」ということが堀の「著名」と関連させて捉えられているのであ

る。

そして、宝(?)亭へ移ってからの彼女と堀の交渉は、少なくとも「パイプの会」で知り合った翌昭和三年の夏頃までは続いていたらしい。三年十月五日付神西氏宛書簡に、「僕はいま貧乏しきつてゐるのだ。多賀羅亭にはもう二月行かない。憫ませよ」とある。つまり金の都合さえよければ当然行くはずなのであり、行けないのは相当の窮状を意味するような行先として、少なくとも神西氏の間では認め合っていたわけであろう。前引谷田氏が「おそらくこの女は、堀辰雄が好きになった一人目か二人目の女性だろう。」と云われる根拠は不明だが、もだん・ぼおいのたしなみというのとは違う気分は、確かに感じられる。

だがこの女性が堀の実生活の上で跡づけられるのは、右に引いた書簡の、三年秋までである。

作品の上では、例えば五年五月発表の「死の素描」で、「天使」とよばれる看護婦と「僕」の間に、

「あなたの天使は何処に居ますの?」 / 「楽園ビルディングの地下室です」 / 「何を職業にして居られるの?」——私、あてて見ませうか? バアの女給さんでせう?」 / 「地下室の天使、ウエイトレス。——僕は思はず微笑した。」

というやりとりがある。これも「カフェ・シアノアル」の彼女を念頭に置いた発想と見られなくもない。しかしこの「死の素描」での「ウエイトレス」である(?)「彼女」は、既に欲望の対象ではなく、情緒の対象という性格さえも薄らいでいるのではないか。「僕と彼女は、初めてランデ・ヴウをした時に、互に約束しあつたものだ。どちらが相手をより多く苦しませることが出来るかやってみよう」というふうに始まつた関係は、例えば「彼女は、彼女自身が空しく僕の手紙を待つてゐることの苦痛をよく知りながら、しかも何度、彼女は僕に



手紙を書かなかったであらう？」又「二人の『苦しめごっこ』の結果」僕は胸部の疾患を得るが、「その得体の知れない痛みを、彼女のことをあんまり思ひつめてゐるための痛みとしか考へ」ず、彼女にさえも「このロマンチックな痛み」を隠している。偶々彼女の前で響め面を見咎められると、今朝見た「鱈に食べられてしまった夢を」思い出したせいだ、と答え、すぐにその答が「彼女に気に入らないことを」認める。「彼女は彼女で、僕のちょっととした響めつ面の中にさへ、彼女自身の苦痛の口実を探し求めずにはゐられない」のである。

この関係を統制しているのは世紀末知識人的な恋愛観と自意識（厳密にいえば、恐らく、それらの結果の模倣）である。それがどれ程深刻であつても（どれ程隙なく模倣されていても）、例えば「聖家族」の絹子に「何とも云へないにがさを味」わせることはないような、別のものに成り立てている。いや、正確にいえば別のもので扱ひ立てているのではないか。

かくして、思いきり卑俗に云えば次のようなことになる。——「ルウベンスの偽画」で△彼女▽を描いていないことが、△彼女▽に宛てた恋文という性質のゆえであり得るように、その後「末摘花」や「聖家族」に至る変化は、△彼女▽以外の女性を対比ししかも軽々と貶めることによつて△彼女▽への口説と成り得る性格をもつ。二つの時期の間には「僕」の「欲望」の「眼ざめ」が在つて、△彼女▽への語りかけかたのえげつなさが生じたものであろうか。

むろん此処で云う恋文とか口説とかの語は、前に用いたときと同様、象徴的乃至比喩的な意味である。特定の実在女性に読ませて実生活上の効果を期待するというような意味に限定してはいないし、それを主に考えてもいない。

そして、「末摘花」に戻つて云えば、この△北国の少女▽については現在までのところでも擬し得るような女性が知られていない。

この少女像の扱いに托して作者の心の内で斥けられるような、現実の堀をめぐる女性やそうした私生活は、彼の伝記の中に現われて来ていない。昭和五年という発表時点から溯つて「五年も前」に「一月ばかり北国の或る小さな町に旅行した」という「末摘花」の設定に、対応させ得る堀の体験といへば、大正十三年七月（正確には六年前になるが）の、在金沢室生犀星宅に滞在した事しかあるまい。しかしその折に知り合い、のちに尾を曳いた少女の存在は伝えられていない以上、「末摘花」の筋立は△体験を用いた部分もある△虚構▽というふうにしかならないのである。

実在もであるが想定できない作品だ、という作品理解を樹てた場合、この作品の△後味のわるさ▽は、理性的には限界を与えられるだろう。作者としても恐らく、もであるが無かつたからこそ、ここ迄、必然性を越えた嘲弄を構成することに、さしたる自己嫌悪も覚えずに済んだ（？）のであろう。

だがそのことを逆に云えば、実在人物を傷つけるといふ△実害▽がない限り、作中（のみの）人物を放縦に弄ぶことによつて、△女友達の一人▽に△虚益▽を呈する（むろん心の中で）、ということである。堀の初期の作品の幾つかに△恋文▽という性格を考へる場合、その一つの典型という位置づけは矢張うごかせないものであろう。

注1 小久保実氏『堀辰雄論』（麦書房版）付録「堀辰雄関係同人雑誌目録」による。

- 2 小久保氏前掲書、『菜穂子』と『物語の女』と『聖家族』と
- 3 角川書店版・十巻本『堀辰雄全集』第九巻「書簡」篇、巻末解説
- 4 佐々木基一・谷田両氏共著『堀辰雄』（五月書房版）、「死と愛の苦悩」
- 5 『文芸』昭和二十八年八月・堀辰雄追悼号収、「思ひ出の一時期」
- 6 角川文庫『聖家族・燃ゆる頬』巻末解説「若き日の辰雄」
- 7 明治書院版・写真作家伝叢書『堀辰雄』、「第一作品集」

- 8 注5収、『驢馬』時代の堀とのこと」  
9 同右収、『堀辰雄の思ひ出」  
10 注4、『昭和初年」

(昭46・2・8稿)